

教職員のコーナー

オートバイの旅 雑感 その2

鎌田 実

昨年の広安里で私は、学生時代に大好きだったオートバイの旅について書きました。テントを積んで、行き先も期間も決めず、風の赴くままに旅をしたことです。海外に暮らす皆さんなら、多くの方々の賛同を得られると思うのですが、計画を綿密に立てて出発する「旅行」よりも、リスクは大きいかも知れないけれど、行き当たりばったりの「旅」の方が楽しいと思いませんか。気まぐれで横道にそれていく、無計画でデタラメな旅の方が、2倍も3倍も楽しいのではないのでしょうか。それは飾らない人々の生活が垣間見られたり、本当の人とのかかわりに出会うことができるからです。様々な予期せぬアクシデントさえ、時に楽しんでいたりもします。また、学生時代に旅をしていて良かったと思うことに、社会人になった今、初対面で会う方々と、その方の故郷の話ができることがあります。「国道 号線を～して...」などと地元の方にしか分からないような話で盛り上がるのであります。

今回は、日本最北端の地「宗谷岬」を目指して走った話をしましたが、今回は旅をしながら日本中の子ども達と触れ合った話をしたいと思います。

前回は少し触れましたが、当時、既に教員を志していた私は、旅に行くときは常に自作の稚拙なアンケートを持って出かけました。機会を見つけては子ども達に話しかけ、触れ合いをもつためです。特に日本1周したときには、合計500枚のアンケート、つまり500人の日本中の子ども達と話しをすることができました。それらのアンケートを当時は、卒業論文に利用するつもりでしたが「うーん、資料としての価値はないなあ。」と指導教官に言われ断念しました。しかし、それ以上にそれらは、私の宝物になりました。今でもアンケート用紙1枚1枚を見ると、旅をした記憶が鮮明によみがえると同時に、教員を志していた頃の初心に戻ることができるのです。旅の最中、いろいろなことがありました。

長野市では、仲良くなった男の子3人組にせがまれてプールに一緒に行ったり（もちろん保護者同伴です。その後何度か手紙のやりとりもしました。）...、上越では、どういう経緯だったか、図書館で1日家庭教師になったり...、八代の国道3号線沿いの小さな町では、やんちゃな子ども達とセミ取りをしたり（「ぼくたちは毎日この神社にいるから、また来てね。」という言葉が忘れられません。）...、青森では、函館から転校してきたばかりだという子どもと知り合い、函館の友達に手紙を託されたり（奇跡的に届けることができました！）...、札幌では、大勢でキックベースをし

て、次の朝、その中の一人の子が、お母さんと一緒にお弁当を持って来てくれたり（可哀想に見えたのかな？）...。もちろんいいことばかりではありません。不審者と間違われぬように、細心の注意を払っていたにもかかわらず、自転車を放り投げて走り去られたり（その晩は落ち込んだ...）...、遊んでいる子ども達に熱心に声を掛けても、全く相手にされなかったり...、拳げ句の果てにテントをロケット花火的にされたり（オートバイ乗りはかなりの確率で同じ目に遭います。）...

教員になり旅を回顧するようになって、気づいたことがあります。私を受け入れてくれた子ども達、そして、上手くとけ込むことができなかった子ども達にはある共通点があるということに。それは、すんなり受け入れてくれた子ども達は「異年齢集団」で、なかなか受け入れてくれなかった子ども達は「同学年と思われる集団」だったことです。ここからは推論ですが、遊びや様々な活動の中で、異年齢とのかかわりを多くもっている子ども達は、私という異質なものを本当に自然に、何の抵抗もなく受け入れてくれたと感じます。逆に生活の中で同学年という等質の仲間とのかかわりが多い子ども達は、私という異質なものを受け入れることに抵抗や躊躇があったように感じます。これは地域や年齢を問わずそう感じました。

さて、ここで釜山日本人学校に今まで述べてきたことを重ね合わせてみます。私は約1年半、本校で勤務しました。私なりに本校の良い所も、欠点（...というか恵まれない点）も何となく分かってきました。基本的に日本の教育と同じ内容を、日本とは全く違う環境の外国で行おうとしているのですから、マイナスの要因が多いことは事実です。しかし、そんな中で本校の良さであると胸をはって言えることは、学年を問わずみんなと一緒に様々な活動を行っているということです。小中併置校ですから、実に年齢の幅が広いです。休み時間の様子を見てみると学年など本当に関係なく、みんなが自然に一緒に遊んでいます。しかもここは外国です。言葉も習慣も違う人々と日常生活で接することができます。ここは異質なものを抵抗なく受け入れ、理解しようとする国際感覚を身につける大変良い環境だと思のです。

本校の子ども達はきっと、オートバイに乗った変な若者を抵抗なく迎え入れてくれるでしょう。そして将来、国際感覚を身につけた立派な人物として活躍されることを期待しています。